

江戸時代の花たち

10

小笠原 亮

書物に見る
江戸時代の園芸文化

左/「菊百詠」(「菊譜百詠図」がもと題簽か)原著は明の徳善斎著、明崇禎12年刊上下附3冊本の和刻本表紙
右/「菊百詠」の図の部分見開き。恭斎により点訓を加えて京都で貞享3年翻刻出版された



上/「菊ノ画譜」1巻 元は二巻に画かれたようだが一方が後世失われた由、江村氏の箱書に見える
下/「菊ノ画譜」武林唯七(雪洞)画 元禄3年菊月の奥書ならびに落款あり



江戸時代初期のキクブーム 赤穂義士も菊づくり

「時は元禄一五年極月一四日、雪を蹴立ててまっしぐら サツ サツ サツササササ……目指すは本所松坂町……」講談でおなじみの赤穂浪士吉良邸討ち入りの読みはじめである。江戸時代も寛文、元禄と時が流れ人々はようやく太平の時代を楽しむようになり、キクづくりも盛んになった。

今回ここで紹介する「菊ノ画譜」は赤穂浪士のひとり、武林唯七の作と伝えられ、巻末には「元禄三年菊月下弦 武林雪洞」と墨署ならびに落款があり、画かれたキクは総計五一種に及ぶ。唯七の作との真贋は後の研究に託すとして、同時代の出版資料たとえば「花壇綱目」延宝九年大坂刊。「畫菊」元禄四年京都刊。「花壇地錦抄」元禄八年江戸刊などと品種照合を行った結果、重なる品種が多く、ほぼ同時代の成立として間違いない。

さすれば元禄三年頃、三都(京、大坂、江戸)以外の地方都市においてこのようなキクの品種コレクションと栽培が行われたことを示す好資料とも考えられる。

一方、この時代のキクの栽培技術はどのように修得したか。わが国で出版された最初のキクの図譜であり栽培法の書かれた本としては、明の徳善斎著「菊詩百篇」明崇禎一二年刊を、恭斎なる人が点訓を加えて「菊百詠」と題して京都で翻刻された。百種のキクの品種には七絶調二八文字で色彩や特徴が書かれ、付録一冊は詳細に栽培法が記され、さらに使用する道具類も図示され栽培テキストとして大いに利用されたと思われる。蛇足ながら、武林唯七も藩主の刃傷事件さえなければ、後世に名を残すキクづくりとなったのであろう。